

第2回吹田市総合計画審議会

開催日時 平成15年12月25日(木)午後2時30分～午後5時00分

開催場所 吹田市役所 中層棟4階 第4委員会室

議事内容 (1)吹田市第3次総合計画基本構想(素案)の検討

第1章 総合計画の策定の背景

第3章 人口と都市空間

出席者(委員) 石森秀三 衛藤照夫 浜岡政好 三輪信哉 宗田好史
生野秀昭 木村 裕 倉沢 恵 神保義博 寺尾恵子 野村義弘
筏 隆臣 蒲田雄輔 鮫島 匡 前田武男 山口克也
安達憲夫 伊東利幸 尾高榮次 影山義紘 河井明子
河野武夫 阪口善次郎 永田昌範 西岡昌佐子 菱川音三郎
北野義幸 (欠席3名)

(助 役) 清野博子

(事務局) 富田企画部長 牲川企画部次長 池田総括参事 宝田参事

稲田主査 岡松係員

(傍聴人) 2名

議事要旨

(1)吹田市第3次総合計画基本構想(素案)の検討

配付資料の説明

(事務局より配付資料の説明)

(会長)

事務局から説明があった資料について、質問があれば頂きたい。

(A委員)

人口推計の資料の13ページについて、2つ質問がある。

1点目は、「(3)若年ファミリー層の受け入れ」で、吹田市もそうだが日本全国で団塊の世代の55歳をピークにする層と、団塊ジュニアの世代の30歳をピークにする層の2つの山がある。今まで若年ファミリー層を吹田市が受け入れたのは、たまたま団塊ジュニアの層が住宅を取得したからである。全国的には団塊ジュニアが劇的に減る中で、若年ファミリー層が増える傾向が続くと判断した理由がわからない。今までマンションを建てれば売れる状態が続いたが、まもなく終わろうとしている。

2点目は、「(1)千里ニュータウンにおける住宅団地の建替え」で、千里ニュータウン

の6割が公的賃貸住宅であるため、大阪府住宅供給公社、都市基盤整備公団の役割が非常に大きく建替えに関係しているが、大阪府の財政や都市基盤整備公団の政策変更の中で、また人口減少時代に都心への人口回帰が非常に進む中で、ここで想定している人口増加に結びつくのだろうか。千里ニュータウンの建替えについての確実な根拠があるのか。

(事務局)

若年ファミリー層の受け入れだが、吹田市の人口動向の4ページのグラフでは団塊の世代とその子ども世代が大きな人口を構成し、全国的にもこの傾向がある。したがって、このままでは人口が減少する。しかし、大阪市役所を中心とした50キロ圏をみると人口減少が既に起こっているが、その中で吹田市はかろうじて人口増を守っている。この世代は出て行くより、逆に入る方が今はまだ多い。

(A委員)

つまり遠くに家を求めずに、幸い地価が下がったから吹田市ぐらいで止まったので人口が増えたということだが、では将来はどうなるのか。

(事務局)

将来全体的に人口は減るが、良好な住宅の環境を維持し、子育てしやすいまちのイメージをキープすることを一つの条件とし、外へ出て行く人達を呼び込めると希望している。

(A委員)

何も無く維持するのではなく、何かソフトを積み重ねることで増えて欲しいと希望しているということか。

(B委員)

前回の会議で20年後にどのような人口構成になっているかということを尋ねた。具体例で言うと千里ニュータウンの建替えで人口を維持するとしているが、十数万円の家賃を払えるような人口がそんなにあるのか。20年後の人口、年齢別の人口構成の具体的な数字は非常に重要になると思う。地域別の人口では、地域的な動向を反映させておらず、数学的に計算されてきた数字を積み上げたものにとどまっている。

前回にお願いしていたが、地域別の税収を教えてもらいたい。税収をどのように確保するかということで質問したが、都市計画税とか固定資産税その他のバランスはどうなっているのかを地域別で見たら大体判断できると思う。

(事務局)

5 歳年齢別の推計は非常に細かい数字なのでこの資料では載せていないが、次回提出する。

税収の議論は次回の審議会で行う予定である。地域別の税収は、どのような議論のために必要か、事務局としてもよく理解できなかった。

（事務局）

そのような仕組みで統計を作っていないので相当の手間暇がかかる。

（Ｃ委員）

人口推計では自然増減が当然大きく関わる。この文章中でも少子・高齢化がたくさん出てくる。今後の人口推計で出生率をどう見ているかで大きな影響があると思う。国立社会保障・人口問題研究所のデータを用いているのか。今、全国値が 1.3 で大阪府が 1.2 ぐらいに下がっているが、大阪府の人口の将来推計では今後 10 年 20 年は回復傾向にあるとさせてもらっている。この点、中々厳しい現状にあり現在点検作業を進めている。国（国立社会保障・人口問題研究所）の新しい推計も出たところであり、その辺はどうみられているのか。

（事務局）

人口推計の資料の 17 ページの「各種設定値の解説」という部分で、出生率とはある年次における 15 歳から 49 歳までの女子の年齢別出生率である。これは国立社会保障・人口問題研究所により都道府県別に示されており、この大阪府のデータで推計を行った。

（Ｃ委員）

出生率だけ用いたのか。

（事務局）

生残率も国立社会保障・人口問題研究所による数値を使った。

第 1 章 総合計画の策定の背景

（会長）

第 1 章の総合計画の策定の背景について検討をお願いしたい。

二重構造型都市であることは、「大阪都市圏における吹田市の位置づけ」の 24 ページで非常に明確に出ている。業務集積都市としての性格があり、流入率がある程度高い。また、住宅都市という面では流出率が高い。その点はデータが示す通りである。基本構想の 7 ページの「(4)地域ごとに異なる特色」では、住宅都市としての発展と、産業集積がみられるとしているが、もう少しその点をよりクリアにした書き込みがある方

が良い。

(B 委員)

緑豊かな住宅環境という言葉がこの文章の中に 1 つも入っていない。それは入れておかなければいけない。

(会長)

市民意識調査でも緑の問題が大変重要なものとして、指摘があった。

(D 委員)

交通の利便性で、阪急千里線はダイヤが悪くなり、本数が減っている。乗降客数も関大前から南はいいが、それより北は減っている。

(会長)

市民意識調査では利便性はあると感じている市民が多いが、一方では今のような指摘もある。

(E 委員)

基本構想の「(1)交通の利便性」の上から 3 行目の文章で、「地域の大半が駅からの徒歩圏」とある。我々の地域から最寄り駅まで 25 分から 30 分ぐらいかかる。交通網としては結構あるが、それを利用する市民はどこまで利便性として感じているのか。表現を考える必要がある。

(F 委員)

阪急電鉄、JR のどちらを利用するにしても、快速や特急や急行が全く止まらない。時間帯により、大阪から高槻に行く方が吹田に帰るよりも早く着く。いろんな交通機関はあるが、住み手からみれば何が利便性かということがある。
都市計画マスタープランで「西吹田駅(仮称)」とあるが、新しく駅を作るより快速を吹田駅に止める方がより便利になる。

(事務局)

JR と阪急電鉄に聞いたことがあるが、阪急千里線は各駅停車しかないが、待避させるところがないため快速は通せない。また、カーブが多くスピードアップもままならない。JR は乗降客数は少なくはないが、新大阪や大阪に近すぎ、位置的に快速等を止めるのは無理という答えであった。

(会長)

今の指摘も重要だが、個別の話をするとおさまりがつかない。

「市民意識の調査結果の概要」の４ページの定住の理由には、「通勤・通学に便利だから」で「おおいに関係ある 23.3%」「やや関係ある 21.2%」とある。また、「鉄道や道路などの交通網が便利だから」で「おおいに関係ある 38.1%」「やや関係ある 34.1%」とあり、７割を超える市民が評価している。

また、「緑や水辺などの自然環境に恵まれている」は 50% 超える人が関係あるとしている。

この調査をどう判断するかということもあるが、多くの市民の意識では、このような特性が吹田市にあると感じられている。

（Ｆ委員）

私が言いたかったのは、吹田市の特性の１番として、交通の利便性をもってくるのは果たして妥当なのかということである。

（会長）

今後の市のビジョンとも関わるので、特性として何を優先するか充分議論して頂きたい。

（Ｇ委員）

基本構想の６ページの「(3)暮らしを支える生活関連施設」で「国立循環器病センターなどの先端医療施設」としているが、先端医療施設は吹田市の場合、国立循環器病センターと大阪大学の２つだけなので、「など」とはせず大阪大学を明記してほしい。

（Ｈ委員）

「(3)暮らしを支える生活関連施設」で、公共施設はあるが商業施設の利便性もよく聞く。商業施設が整備されていると入れる必要がある。

（会長）

優先順位の付け方にも意見があればお願いしたい。

（Ｉ委員）

「2吹田市の特性」にある項目は優先順位なのか、それとも並列か。

（会長）

並列と言えば並列だが、読む側からすると違う場合がある。

（Ｉ委員）

優先順位をつけると意見が交錯してまとまりがつかない。

（会長）

並列関係とみなすか、ある程度の優先順位が込められているようなニュアンスで受け止めるのか、意見をお願いしたい。

（Ｊ委員）

並列だと思う。

列車のスピードや急行が止まらないとか、それは個々の問題であり、吹田市はかなり交通の利便性は良いと私は認識している。

（会長）

緑が多いという環境のことについても入れるべきと指摘があるので、その点もお願いしたい。

（Ｂ委員）

基本的に総合計画は市民が読んだ場合に心に残り、市民の感情と合っていなければならない。「市民意識調査結果の概要」の８ページで、「吹田市に愛着や誇りを感じるところ」では、「万博記念公園がある」「公園をはじめ、まちに緑が多い」が突出している。なぜ吹田市に住んでいるかというと、公園があって緑があるからである。市民の意識では特に交通の利便性があるから住んでいるのではないということもあり、順位が下がるかもしれない。

（会長）

「緑や公園が多いまち」であるという提案は、新たな特性として１つ書き加えるべきであろう。

並列関係であっても、ある程度並び方については市民の意識に配慮する必要がある。

（Ｋ委員）

今言われたことは結構であり、賛成する。

他都市やビジターから吹田市を見ると二重構造都市が大きな特性である。良い部分は当然多くあるが、悪い部分も多くある。産業業務集積があると言いながら、それは江坂と吹田の駅前だけであるとか、そういうことも踏まえて記述する。これでは観光案内をしているだけの特性に思える。

（Ｌ委員）

吹田市に万博公園があるから緑が多いというのは、市民の意識から確かにあるかもし

れないが、単に吹田市の都市公園の面積が他市に比べて多いだけである。緑が有るか無いかは、実際私たちが住んでいる所に緑が有るか無いかを考えるべきである。この近所を車でまわると、茨木や高槻の方が緑は多く、山がある。これから都市づくりをするにあたり、緑豊かだとしていいのか疑問を感じる。

(I 委員)

市民意識調査をみると、アンケートの 1 番最初に「万博記念公園がある」とあるので、それが選択されやすい。実感として緑が多いとは思っていない。JR 以南地域はどこでも少なく、何としてもニュータウンの緑被率を追い越すのが長年の希望であった。

(会長)

並列ということには皆様異論はない。

このような意識調査で、調査の仕方により様々な誤差が生じることは、様々に研究されているが、我々としてはこの資料に基づいて考えざるを得ない。

「**2**吹田市の特性」で、今記述されていることにプラスして商業についてもある程度ふれることが必要である。「(3)暮らしを支える生活関連施設」ではもう少し丁寧な記述が必要である。「(4)地域ごとに異なる特色」では、地域の特色をひとまとめにしている中で、住宅都市と業務集積都市という記述はされているが、そういった二重構造型都市という特性的なものをより明確にした方が良い。緑や公園の問題も、それぞれの考え方はあるが、ある程度市民の意識を配慮するならば、特性の 1 つとしてあげられてもしかるべきである。特性の並び方については、ここで議論し、1 つ 1 つ投票で 1 番多いものを決めるというものではない。様々に出た意見と市民意識調査をふまえて事務局の方で精査し、次回審議会で整理して提出していただきたい。

(G 委員)

特性の「(2)充実した文化・学術・研究環境」は古い市長の時代の思いがここで実っている。大阪大学や万博記念公園ができたのは、何代かの市長の思いがあったからである。その点でもう少し丁寧に書き込んでもらいたい。

(M 委員)

その意見に賛成である。昔の市長は用地買収で苦労をしてきた。

(会長)

先人の業績についても、特定個人を賛美しすぎるのはいかかと思うが、ある程度言葉丁寧に記述できるところは配慮していきたいと思う。

(D 委員)

「緑豊かな」というのは先人のおかげでこれだけ豊かになった。それを我々は守って行かなければならない。その思いが私は一番大事だと思う。

(N 委員)

「**2**吹田市の特性」には入らないかもしれないが、最近小学校の乱入等の非常に危ないことが起こっている。吹田市として危機管理の体制を特色の一つとしてあげるか、今後の将来像の中で考えないといけない。

(会長)

基本構想の 12 ページ「吹田市の将来像」の施策大綱の 5 番目に「魅力的で安全なまちづくり」とあり、将来像のどこかである程度配慮させて頂きたい。

(O 委員)

「**2**吹田市の特性」で「(1)交通の利便性」「(2)充実した文化・学術・研究環境」「(3)暮らしを支える生活関連施設」「(4)地域ごとに異なる特色」という 4 つのくくりになった理由がわからない。「(2)充実した文化・学術・研究環境」「(3)暮らしを支える生活関連施設」は似ているところがある。もう一度丁寧にやり直すと、くくりも変わってくるのではないか。

(事務局)

庁内の議論では、緑豊かな住宅都市とか、文化施設についてももう少し書くように指摘があった。基本構想を最後にまとめる時に、他の都市と比べてどこが吹田らしいかということと、施策にどう結びつけられるかを考え、この 4 つに整理した。「(4)地域ごとに異なる特色」は今後の地域別計画を策定することを考えて特性の中に入れた。

(O 委員)

今後のことを考え、4 つのくくり方にしたということ でわかった。

(B 委員)

特性と沿革は並列的で面白くない。このような沿革があり、吹田ができ、住宅や商業が発達したという特性であれば、血のかよった総合計画になる。

(会長)

沿革の部分は少しあっさりしている。もう少し丁寧な書き込みがあってもよい。

(P 委員)

基本構想の 6、7 ページを見ると箱モノばかりが出てくる。これからの総合計画づく

りには、最後の 28 ページにある協働とか参画とかがクローズアップされてくる中で、ここに住んでいる人がどんな思いでここに暮らしていきたいかとかが重要なファクターである。文章で書けるかというのは別だが、ここに人間の顔が見えてこないとまずいと思う。

(会長)

なかなか特性として書くには難しいテーマである。市民意識調査結果の概要の 2 ページでは「住み続けたいと思っている」が 53.8% です。これが多いとみるか、少ないとみるかということもある。

(E 委員)

例えば「(2)充実した文化・学術・研究環境」で、「ソフトの受け入れ体制が整っている」とか、そういう形で繋げていく表現でも良い。

(会長)

皆様から指摘頂いた問題点をもう 1 度事務局で様々なデータとつぎ合わせ、整理をし、次回に提出してもらいたい。

「3の吹田市を取り巻く動向と課題」について意見をお願いしたい。

(A 委員)

ここの「(1)少子・高齢化の進行」と 13 ページの「第 3 章 人口と都市空間」の内容は繋がっている。千里ニュータウンの問題は非常に深刻で、少子・高齢化を既に経験している欧米先進国ではニュータウンのスラム化が起こっている。13 ページでは、市民との協働によるまちづくりを進めていくことで、環境と調和した開発を誘導し、人口増加を見込むとあるが、都市計画の専門家として言うとなんかやさしいものではない。今はかつての先人と同じように、15 年先、30 年先を見据えた時に、展望が開けるような知恵を出さないといけない。

千里ニュータウンという大規模な開発を国、公団、大阪府が率先してやってくれたからここができた。しかし、官主導が多く、他の都市と違って市民自ら何かを作ったのではなく、行政に作ってもらった都市に文句を言いながら住み続けるという状況で今まで来てしまったのではないか。

市民意識調査で気づいたことは、吹田市民が分裂傾向にあるということである。高齢者の方が第 1 グループ、55 歳の団塊の人が第 2 グループ、第 3 グループが団塊ジュニア層、学生や若い江坂周辺の住民が第 4 グループ、この 4 つのグループが全く異なった意識を持って吹田を見ている。実は高齢者の方と団塊の世代、あるいは団塊の世代と団塊ジュニアの間には将来のまちづくりに対する深刻な対立がある。その対立を乗り越えながら、これから 15 年間で高齢化がもっと進んでいく中で、住民の協力の下に

福祉も充実していく必要がある。

これから 15 年間は官主導でなく、ちゃんとした住民参加で危機を脱する方法を探らなければならない。人工的に作ったまちだからこそ、他のまちでは考えられない大きな転換点がある。15 年先のプランをつくる時にもっと事態を深刻にとらえるべきだ。これからは行政に何か言えばやってくれるという時代ではない。財政的にもっと小さくなった吹田市が何とか生き残っていくために、市民が何をしなければいけないかという視点で書くべきである。

(会長)

データをみると住民の意識の分裂は大きくなる可能性が高く、吹田市を取り巻く動向と課題の中で明確に位置づけられる必要がある。

(B 委員)

ばらばらだから悪いのではなく、ばらばらだから逆に成り立つようなところもある。例えば、吹田市は江坂地域の固定資産税によってたくさんの住民が養われている。お互いを補った関係のバランスを崩してはならない。その意味で税収はどうかということを知っている。江坂地域のオフィスやマンションが空洞化していることに行政は気づいていないと思う。

住宅を考えると大きな転換期が来ている。今まで大阪に産業集積をしなくてはならず、千里ニュータウンは住めればよいというレベルのまちだったのではない。今後は、住みたくするような、その中で生まれて死んでいくことが喜びであるまちの形を作らないといけない。その意味で、千里ニュータウン自身が競争力のある住宅地でなければならない。

(会長)

今の指摘は「大阪大都市圏における吹田市の位置づけ」に絡む。その 1 つの特徴として、吹田市の場合には二重構造型都市なので、住宅都市という側面とある程度業務機能が集積した都市であるということを特性の中で述べるということであった。これももう 1 度位置づけをきちんとし直す必要がある。

(F 委員)

少し以前の新聞で、現在の幼小中高の各児童・生徒の体力の低下が著しいという記事があった。私の手元には、全国平均と大阪府の資料しかなく、事務局の方で吹田市の小中高の児童・生徒の体力を全国的な平均と比べたデータを集めてもらいたい。子どもたちの体力の向上を吹田市の課題として大きく取り上げていかないといけない。

(D 委員)

吹田市では毎年秋には健康展で希望者の体力測定や血圧を地域別に行っていたと思う。そのようなデータを頂けたらと思う。

(E 委員)

「**3**吹田市を取り巻く動向と課題」を第2次総合計画のそれと比較したが、言葉としては変わっているが新鮮味がない。「情報化」という言葉も入ってきているが、「少子・高齢化」を含めてどこの市でも共通の動向、課題である。吹田として、もう少しどこかに焦点を当てて欲しい。

結局はまちの再生だと思う。産業構造と住環境というものを将来構想の下でどのように持っていくかである。

グローバル化とか国際化等の言葉が欠けているところもあり何か違いを出したい。

(P 委員)

基本構想の8、9ページの表題がしっくりこない。「取り巻く動向と抱える課題」だったらはっきりする。この「(1)少子・高齢化の進行」「(2)地域経済の変化」はどちらかといえば抱える課題に少し触れているが、「(3)環境問題に対する意識の高まり」「(4)安全に対する意識の高まり」「(5)情報化の進展」「(6)地方分権の進展」はどこでも通用する当たり前のことなので、やはり本市として本当に重要な課題であることを掘り下げた方がよい。

(Q 委員)

地域経済の変化、地球規模での交流の拡大のところで、グローバル化というのは、戦略的なものだと思う。小さい意味でグローバル化からの効果にも繋がるが、地域で自分達に必要なサービスは、地域で供給するような地域経済の仕組みがより必要である。コミュニティワークという視点でNPO等も増えており、今までの大きな企業や大きな自治体が行ってきたことを、市民の自治の部分で取り戻すという部分が顕著になってきているが、経済あるいは国際化からグローバル化も含めて、そういうことを深く書き込んでいくことも必要だと思う。

(C 委員)

全体の動向と本市との間に、広域的な行政範囲でのことを入れる方が、実際生活の現状や課題の基本になると思う。その意味で、吹田市の市域から少しにじみ出した記述があれば良い。

卸売業の販売額が非常に落ちているという話があったがどの業種なのか。

(事務局)

業種までは調べていないが、江坂地域で落ちている。

(B 委員)

南吹田周辺の倉庫が空いている。その内容は衣料から食料まで様々である。

(事務局)

調べられれば、今の内容をデータで提示したい。

(事務局)

事業所数は減っていないが、従業者はむしろ増えている。取扱量が減っているという動きである。

(副会長)

「**3**吹田市を取り巻く動向と課題」は「**2**吹田市の特性」と関連させて記述する方が
良い。

(R 委員)

特性にしても課題にしても、この先 2020 年度までを考える中で、今から将来に対して
言っていることがこの中にはない。

(B 委員)

環境問題に対しても、安全に対しても意識は高まりではなく、非常に危険な状況にな
っているということがもう少し強く出てこないといけないと思う。

吹田市の文化の後退というのがある。万博記念公園の中の文化施設がどんどん減る傾
向にある。明確に吹田市の文化を守らなければならないという方向性を打ち出しても
らいたい。

(会長)

この動向と課題が今後の将来像および計画を策定する上で、1つのベースとなる。今
の指摘をもう1度整理し、再度次回提示し、意見を頂きたい。

こういう大きな会議でやっているとしても時間が足りなくなるので、会長の考え
としては2つの部会に分け、異なる形でテーマを決めて、部会で大いに煮詰めてもら
いたいと思っている。

(H 委員)

課題、問題意識に関して異論はないが、具体的に少子・高齢化の問題についてどうす
るのか。少子・高齢化は全国的で、吹田市も例外ではないが、少子化の問題に対して
「総合的施策」とはどういうものか。地域経済の活性化の問題でも「極め細かいサー

ビス」しか書いていないが、もう少し具体的に書き込めればいいのではないか。

第3章 人口と都市空間

(会長)

「第3章 人口と都市空間」で「1人口」、「2都市空間」について意見をお願いしたい。

(B委員)

人口を35万にするために、どのような構成の人口をどれだけ引っ張ってこないといけないのか、そのためにどのような建物、住宅がいるのか。そこは実は千里ニュータウンの問題でもあり、全体の問題である。これを一步踏み込んで審議する問題が出てくるので、次回までにこの35万人になった時の人口構成、どのような流入人口の構成があって人口が増えるかということを考えて頂きたい。

(E委員)

「将来人口を予測するのは非常に困難です」という表現は非常に寂しい。経済予測は難しいが、人口予測は比較的間違いがないと言われている。

表現として「将来人口の予測にあたっては、経済状況や国や府の広域的計画による影響を受けるものの、高齢社会の住宅施策や子育て支援など世代を超えて定住性の高い、魅力ある環境整備の積極的な推進を前提として最後の目標年次…」としてはどうか。

35万人というのは外せないと思うが、何とか無理して35万にするという表現ではなく、積極的な推進策でこのようにすると文章を結んで頂きたい。

(K委員)

この文章は、すべて良い方、バラ色で書かれている。現実には問題点もあり、細かい地域経済の事を考えると非常に難しい問題もある。その中で、とにかく35万を死守するという発想にあるからこういう文章の流れになっている。そうでなければ、吹田市の現状で、もっと暗い現状があるのが本来ではないかと思う。それならば、35万人が本当に妥当かを審議しないといけない。それには当然経済の問題が非常に大きく、税収の問題も大きいので、それを検討した上で踏み込めればいいと思う。

(M委員)

確実な予測はできない。千里ニュータウンは1世帯に5人、3万戸で15万人の計画となっていた。ところが世帯人員数は5人から減ってきており、維持することはできず、予測とは違っていた。だから、ある程度のもので決めるしかなく、確実な予測はできない。

(K 委員)

ある程度のは決めないといけないと私も思う。それをこの会議でしないと、文章全体が作れない。最終的な筋があり、フィードバックされてものができる。

(会長)

人口予測は確実だという意見もあれば、予測はできないという意見もあるが、審議会としてはデータに基づき、予測を立てないといけないと思う。

(C 委員)

人口推計で数字を扱う場合、国も府もそうだが1つの前提だけでは難しい。その意味で、上位推計、中位推計、低位推計と前提を置くのが良い。自然増減の出生率の問題と開発がらみの社会増減が非常に関係するので、その前提で考えると一番多ければ35万人で、中位推計ならいくらという数字があるのではないか。ただし、総合計画はあくまで目標値としての性格があり、これらを基礎して考え、市が判断されるということであれば、それで構わないと思う。

(会長)

あくまでも目標数値であり、これを実現できるように総合計画で基本構想、基本計画を立てる。その意味で、簡単に論じることにはできないので、補足的なデータも合わせ、次回もう一度議論したいと思う。

都市空間の将来的なあり方も素案として出されている。意見があればお願いしたい。

(L 委員)

大阪府で合併問題について、吹田市が豊中市、あるいは摂津市と合併するのを大阪府が進めているという話がある。大阪府の指導、あるいは予定や予測がどの程度現実的になっているのか。

(C 委員)

大阪府は合併を進めていく立場ではない。区域全体でのモデルケースを何種類か取り上げている。その流れで進めているところもある。北摂地域では具体的な動きにはなっていないと思う。

(副会長)

都市空間の3つ程の課題があるが、市民が読んだ時に、どんな都市空間ができるのか、ほとんど想像力が沸いてこない。15年後に目指したい都市空間のあり方を、具体的にイメージできる提示をするべきである。言葉としては「特性を活かした都市空間」とあるが、具体的にどのようなものを表現し、目標設定しておかないと後に繋がって

こない感じがする。

(K 委員)

「(3)人と自然の共生空間の形成」は、多岐に渡っており、吹田市ではそれが今生まれてきている。最終的にまとめる時、「(1)地域ごとの特性を生かした都市空間の形成」や「(2)拠点市街地・都市機能軸の形成」を中心に慎重に考えるべきである。地域ごとにいろいろな特性を活かすというのは現状の状態で、それをさらに拠点市街地としての機能を作ることだと思う。これには土地利用が絡んでくると思うが、この辺りが本当の大きなポイントで、慎重に考える部分だと思う。地域ごとに特性があり、それぞれが集合体をなしている吹田の魅力を、もっと増やすべきと思われる。

(事務局)

配付している都市計画マスタープランの中に同じく将来の都市空間を37ページに示している。都市計画の分野では現在この形で考えられている。これを使っていいかどうかということで見ていただきたい。

(会長)

基本構想の14ページの「2都市空間」では、都市計画マスタープランの考え方で十分に反映されてない点もある。専門家が取りまとめているので、これをふまえて次回議論をしたい。

(D 委員)

都市計画マスタープランの審議会を傍聴した。その参考資料で、市民の意見をどのようにマスタープランに取り上げたか理由が書いてある。それを配付してもらいたい。マスタープランの計画期間が20年で、総合計画が15年は何か本末転倒な感じである。

(P 委員)

資料には年月日と資料番号をつけて頂きたい。

(D 委員)

大阪府の都市計画区域の整備、開発及び保全の方針も配付して頂きたい。

(2) その他

(会長)

今後の審議会の進め方について、総合計画審議会規則第7条の規定により、審議会が必要に応じて部会を持つことができるとある。今後この審議会だけで議論が十分尽くせない点がある。次回は全体で3回目の審議会を行うが、4回目以降の審議会につい

て、２つの部会を設けて審議する。部会の編成について、事務局から説明したい。

（事務局）

本日卓上配付している調査票に希望する部会に丸をつけて提出をお願いしたい。偏りがある場合、会長と相談をして決める。日程調整表にも記入していただき、１月１１日までに返信をお願いしたい。

（会長）

私の方から部会の編成について提案させていただいたが、異議はないだろうか。

（複数の委員）

異議なし。

（会長）

希望にできる限り添うようにしたいと思うが、あまりにも差が生じる場合、私の方でより良い形で仕分けたいと思うので、その点ご了解頂きたい。それぞれの部会に部会長を出して頂きたいが、私と副会長は特定の部会でなく、両方カバーするということで、それ以外の委員の中から部会長を指名し、議論を進めたいと思う。会長と副会長で部会の進捗状況を見る。積み上げがある程度できれば本審議会の方で総合的に議論する。

（事務局）

前回の審議会で答申の後に市民の意見を聞き、案としてまとめると答えた。市民の意見については、審議会に報告し、反映させていただくということで、答申としていただいたものをそのまま案としていきたいと考えている。

（会長）

それでは以上で閉会する。

以　上